

PROFILE

鯉 淵 典 之

群馬大学大学院 医学系研究科医科学専攻
器官機能学分野



2001年4月より母校である群馬大学に戻り、三浦光彦教授の後任として器官機能学分野（旧生理学第一講座）の教授を担当させていただいております。

恥ずかしながら、医学部学生時代、生理学は苦手科目でした。再試験を受験する事になり、留年の恐怖から、初めて本気になって生理学の教科書を読み、図書館に通って参考文献をあさるうち、人体におけるホメオスタシス維持の巧妙さに心打たれました。これが私の生理学研究の原点です。試験後も関連する文献を読み、研究室へも足を運ぶ様になりました。そして医学部卒業後、大学院に進み、群馬大学内分泌研究所（現生体調節研究所）生理学の鈴木光雄教授の下で成長ホルモンの分泌調節機構の研究を行いました。

その後、米国ロックフェラー大学で分子生物学の基礎を学び、帰国後、甲状腺ホルモン受容体を中心とした核内受容体を介する中枢神経系の発達調節機構について研究を開始しました。特に発達期の脳におけるホルモン作用の臨界期の形成機構や環境因子（ストレス、栄養、環境ホルモンなどの化学物質）の影響について興味を持って研究してきました。一つの手法にとらわれず、分子生物学から形態学、行動学的解析までなるべく広い手法を用い、分子から動物の個体レベルまでの統合的な生命現象の解明を目標に研究を続けています。当初、生理学における甲状腺ホルモン関連の研究者は、層も薄く、地道な分野でした。ところが近年、環境ホルモン問題からこの分野がにわかに脚光を浴び、毒性学や衛生学の研究者との研究交流の機会が増えました。

現在は、トランスジェニックマウスやミュートマウス・ラットを用いて個体レベルでのホルモン受容体作用を調べると共に、分子生物学的な手法により核内ホルモン受容体を介する転写の調節機構の研究を並行して実施しています。生理学会の中ではまだまだ新しい分野だと思いますが、今後共同研究も積極的に推進していきたいと思っています。

また、群馬大学着任後、科学技術振興機構CREST「内分泌かく乱物質」プロジェクトに参加する機会を得ました。現在はPCBを中心とする内分泌かく乱物質による甲状腺ホルモン受容体を介する転写作用の修飾機構や神経細胞の可塑性に及ぼす作用を調べています。主に分子生物学的手法を用いて実験を行い、着実に成果を上げつつあります。

教育は医学部医学科の生理学以外に、症候と病態生理の一部、生物学の一部の講義を担当しています。医学部の教官である以上、社会の要請に応えうる医師の養成は義務だと思っています。したがって、生理学の面白さを伝えるのみならず、学際的分野や臨床生理学的な分野も積極的に取り上げ、「ベッドサイドで役立つ生理学」を学生に提示していきたいと思っています。また、大学院教育に関してはある程度根気の要るテーマを提案し、実験・論文作成を通じ、体系的な思考能力や情報収集・解析能力を涵養できれば、と思っています。そして、本教室から、環境生理学・システム生理学分野の意欲ある研究者や科学的思考能力を身に着けた臨床医が巣立っていってくれることを願っています。

略歴		1996年	ハーバード大学医学部 客員助 教授 (医科学) (兼任)
1985年	群馬大学医学部医学科卒業		
1989年	群馬大学医学系研究科博士課程 修了 (内分泌生理学)	1999年	獨協医科大学 助教授 (生理学 (液性統御))
同年より	米国ロックフェラー大学 博士 研究員 (神経行動生物学)	2001年	群馬大学医学部生理学第一講座 教授
1991年	獨協医科大学 助手 (第一生理 学), 95年に同講師	2003年	群馬大学大学院 器官機能学分野 教授